

パターンランゲージによる間主観性の形成

Forming Intersubjectivity using Pattern Language

玉牧陽一[†]

YOICHI TAMAMAKI

パターンランゲージを活用した間主観性の形成と活用についての議論.

Forming Intersubjectivity and practical use of Pattern Language.

1. はじめに

大規模、複雑化した今日のソフトウェア開発の実務の場において、設計の詳細に関する判断は担当者にゆだねられ、その範囲は規模と複雑化の加速に合わせて拡大している。このような状況におけるコミュニケーションでは単なる情報の共有では十分ではなく、目的や価値観の共有と言った抽象度の高い判断基準の共有が必要となる。これはソフトウェア開発に関わる利害関係者間での間主観性の形成ということに他ならない。

パターンランゲージは、一般的には問題解決や設計、アイデアの再利用のためのツールとして認識されているが、パターンランゲージを用いた形式知の生成や語彙の抽出の過程はまさに間主観性が形成される最適な場となることに着目したい。

XPをはじめとするアジャイル開発手法ではそのプロセスの定義にパターンランゲージを活用している例として見る事が出来る。アジャイルやパターンコミュニティに参加して驚くことはお互いに初対面であるにも関わらず高い次元で目的や価値観を共有していると認識できることが少なくない。

このような経験から、パターンランゲージの活用と間主観性形成と関係と、実務において間主観性が要求される場面、例えばソフトウェア要求の理解、ソフトウェアアーキテクチャ理解、ソフトウェア開発プロジェクトにおける利害関係者間のコミュニケーション等への活用を議論したい。

2. 論点について

現時点ではまだコンセプトでしかなく、具体化のために論点の抽出と体系化が必要である。現時点で議論したい論点を以下に挙げておく。

[†]株式会社ジャムズ

2.1 暗黙知、形式知とパターンランゲージの関係

パターンランゲージと間主観性との関係を議論する上で暗黙知と形式知、および手続き的知識と宣言的知識とその共有手段について整理する。

	手続き的知識	宣言的知識
暗黙知	徒弟	?
形式知	手順書	仕様書

2.2 アジャイルコミュニティにおけるパターンランゲージの活用

アジャイルコミュニティではパターンランゲージを積極的に活用しようとする傾向が強い。例えばアジャイル開発のプロセスの定義に意図的にパターンランゲージを活用して表現されている。アジャイルコミュニティにおけるいくつかのパターンランゲージ活用の成功事例を見ることが出来るが、その活用形態は体系的でなく個人的な嗜好によるところが大きい。この成功事例を検証して体系化することにより、一般へパターンランゲージ活用を展開しやすくなると考えられる。

2.3 パターンランゲージによるソフトウェア要求の形式知化

ソフトウェア要求の共有の問題は単なる形式的表現の問題だけでなく、利害関係者間の暗黙知の領域にある前提条件、コンテキスト、思惑などの共有にある。このような暗黙知の領域にある宣言的知識をパターンランゲージを活用して間主観性として共有することが出来ないか検討したい。

参考文献

- 1) クリストファー・アレグザンダー、「パターン・ランゲージ—環境設計の手引」,鹿島出版会,1984
- 2) 野中郁次郎,竹内弘高,「知識創造企業」,東洋経済新報社,1996
- 3) ケント ベック,「XP エクストリーム・プログラミング入門—変化を受け入れる」第2版版,ピアソンエデュケーション,2005